

佳作

テーマ1..医療と福祉、わたしの体験
「支える手を、つなぐ未来へ」

愛知県・光ヶ丘女子高等学校2年 杉田 遥香

私には、九十一歳になる祖母がいる。若々しく、いつも身なりに気を遣い、足腰もしっかりしていた。八十歳の時には二泊三日のデイズツーリゾート旅行に出かけ、すべてのアトラクションを制覇するという、私達家族の中で「伝説」となった人だった。

そんな祖母に変化が表れ始めたのは八年前。自宅のシャッターに車をぶつけ、免許の返納をしたところから少しずつもやがかかっていくように認知機能が低下していった。とくに亡くなっている自分の両親を生きていると言ったり、自分は女学生でバレーボールを習っているんだと言ってみたり。ただ、おかしいなと思う日もあればちゃんとしている日もあったし、自宅で生活したいというのが祖母の一番の希望であったので、祖母の生活は、近距離に住む私の両親が通いで支えていた。

しかし、二年前に祖母が倒れ救急で運ばれた時から状況は悪化の一途をたどった。入院していることが理解できず点滴を引きちぎり着替えて部屋を出て行ってしまふ。退院後自宅に帰った後は、両親は昼夜を問わず祖母の世話に奔走することになった。父は一日十数回とかかってくる電話をとり続け、母は毎食分の食事を運ぶ。私は学校帰りに様子を見に通う日々だった。もう何年も、家族で外出もままならない日々だったことを思い出す。我が家の旅行は『いつ何時祖母に何かあっても駆け付けられる場所』が第一条件だったのだ。

そして今年の五月二十六日。いつもと違う時間にたまたま祖母の家に寄った父が、テーブルの上で手つかずのお弁当を発見した。胸騒ぎがして奥の寝室に駆け込むとおおむけで倒れている祖母を発見したのだ。

二回目の救急搬送となったことで、医師から、施設への入居を促された。一番の希望であった自宅での生活ができなくなってしまったことで

不安にさいなまれる祖母と、祖母の希望をかなえてあげられなくなったことで、両親が祖母に対して申し訳なさを感じている姿、どちらを見ても胸をつかまれるくらい辛かった。誰が悪いというわけでもないのに。そうして迎えた祖母の施設での生活。実は、思いがけず快適なスタートを切っている。帰りたいと言われるだろうと恐る恐る面会に行った私達を笑顔で迎えてくれた祖母。「食事の時間だから行くわね」と私達の方を振り返ることもなくみんなと食堂へ行く祖母。私達は思わず顔を見合せて笑ってしまいました。

今のその姿があるのは、施設のみなさんやケアマネジャー、訪問介護の方々の祖母に対する、そして家族である私達に対する大きな理解と、本当に細やかな配慮があったからに他ならない。入居前、施設の職員さんに言われた言葉がある。

「これまでご家族だけでよく頑張って来られましたね。これからは私達が一緒です。お母様のこれからの幸せをここにいる全員で考えていきますしょう。」

そう言われた瞬間、横にいた両親が泣きながら大きくうなずいていた。私もふつと背中が軽くなった気がした。

今、施設の方々は豊富な知識と経験を元に、祖母の生活のためにたくさん提案をしてくれる。そのすべては祖母が幸せと思えるように、毎日楽しいと思えるように、という思いにあふれている。そして両親や私にとっても、相談できる人達がいること、頼れる場所があることが、こんなにも心強いことだと感謝してもしきれない。

祖母は私に老いるとはどういうことかを身をもって示してくれる。老いることは怖いことではない。誰かを頼って生きることが悪いことではないのだ。

そして私は今、看護師になりたいという夢に向かって走っている途中だ。私もいつか、誰かを支えられる存在になりたい。支えるとは寄り添い、共に歩むこと。私はその姿を祖母から教わった。